LOOK FORWARD
未来をともに進もう。

オピニオン「オープンカレッジ」

現代社会学部安藤りか准教授の「『転職＝悪玉』論のルーツを探る ～日本独自のキャリアモデル構築へ～」掲載

●中部経済新聞　2016年5月16日（月）

Opinion オピニオン

オープンカレッジ

「転職＝悪玉」論のルーツを探る

日本独自のキャリアモデル構築へ

名古屋学院大学
現代社会学部准教授
安藤　りか

今日、転職は珍しいキャリアではない。ある調査によれば、有職者の6割が転職経験者である。しかし、一般に、わが国では転職は「我慢が足りない」などと否定的に解釈されてきた。また、筆者の専門である心理学的キャリア研究においても「アイデンティティーの未熟さ」などの文脈で論じられる場合が多い。このいわば「転職＝悪玉論」（以下、悪玉論）は何に起因しているのだろうか。そのルーツを探るべく二つの研究を試みた。

まず、わが国における悪玉論の誕生経緯を探った。結果、意外にも、士農工商が敷かれていた江戸時代にも実態としての転職は活発に行われていたことがわかった。しかし、「百姓（武士）の家に生まれた者は、生涯にわたり百姓（武士）である」と人々に了解されていたため、転職は不可視の現象であったのである。

ところが、明治時代になると、個人別記載になった戸籍制度とも絡みながら、「自分で職業を変えることができる」という意識が浸透し、転職という認識が生まれた。文献に悪玉論が初出するのは、立身出世のための競争や就職を回避する「煩悶青年」「高等遊民」と呼ばれる高学歴青年達をめぐる論争が起こった明治時代後半である。当時の青年向き啓発本には、青年に就職を勧め、かつ転職を思いとどまらせようと叱咤（しったする厳しい文言が並んでいる。ここにわが国における悪玉論が誕生したのだと筆者は考えている。

次に、米国のキャリア理論における転職観の変化を探った。わが国の研究で参照されるキャリア理論のほぼ全てが米国発祥であるため、悪玉論はその影響ではないかと考えたのである。結果、米国の理論でも、1970代までは、転職は人格の未熟さや精神病理による「逸脱」として扱われていたことがわかった。その理由は、キャリアの語義の変遷と密接に関係するだろう。

もともと轍（わだち）を意味していたキャリアという言葉は、19世紀の産業化に湧く米国で「企業の中の地位の階梯（かいてい）を上がること」とその語義を変化させたのである。それがキャリアだとすれば、「一つの企業に長くいて、昇給や昇格を求めるべきだ」という、わが国の終身雇用制度のような発想が生じてしかりであるし、その待遇を手放すとしたら、それは逸脱でしかないということなのだろう。

しかし、その後の種々の社会変化を経て、90年代以降は、転職を前提とする「バウンダリーレス（境界のない）キャリア」などの理論が提唱されるようになっている。したがって、現在の米国の理論には悪玉論はみられないが、それらの新しい理論がわが国の研究で参照されることはあまり多くはない。

これら悪玉論のルーツも踏まえた上で、筆者は、転職の肯定的側面に注目した日本独自の「善財童子キャリア」モデルを提唱している。善財童子とは、仏教の華厳経に登場する53人のさまざまな職に就く先達を巡って悟りに至った青年である。

転職経験者が6割を占める現代、転職によって人間性を磨いていく人もまた増えているのではないだろうか。

あんどう　りか　キャリアデザイン、臨床心理学。名古屋大学大学院教育発達科学研究科教育科学専攻満期退学。博士（教育学）。臨床心理士。